

試訳：ピエール＝シルヴァン・レジス 『哲学の体系』（1690年）

形而上学編第一巻：序文／第一部「存在について、および精神・物体・神・人間の本性について」第一章「自らの固有の存在をいかに確証することができるか」

田村 歩

1. 緒言

本稿は、その表題のとおり、ピエール＝シルヴァン・レジス『哲学の体系 [Système de philosophie]』（1690年）の部分試訳（本邦初訳）を行うものである。試訳の前に、当該の著者と著書とについて、またその邦訳の意義について、簡潔な解説ⁱを付しておきたい。

ピエール＝シルヴァン・レジス [Pierre-Sylvain RÉGIS] は、17世紀フランスの哲学者である。1632年にアジャン [Agen] 近郊に生まれ、カオール [Cahors] のイエズス会系カレッジで教育を受けた後、パリ大学にて神学を修める。デカルト主義者ジャック・ロオー [Jacques ROHAULT]ⁱⁱに師事し、デカルト [René DESCARTES, 1596-1650] の哲学の発展と普及とに努めた。著書に、『哲学の体系』の他、『ダニエル・ユエ「デカルト哲学批評」に対する答弁 [Réponse au livre qui a pour titre “P. Danielis Huetii, [...] Censura philosophiae cartesianae”]』（1691年）、『デュ・アメルによるレジス「デカルト的哲学体系」への批判的考察に対する答弁 [Réponse aux Réflexions critiques de M. Du Hamel sur le système cartésien de la philosophie de M. Régis]』（1692年）、『理性と信仰の使用、あるいは理性と信仰の調和 [L’Usage de la raison et de la foi, ou l’accord de la raison et de la foi]』（1704年）がある。1699年にフランス科学アカデミー会員に選出され、1707年にパリで死没した。

本稿が部分試訳を試みる『哲学の体系』は、論理学編・形而上学編・自然学編・道徳論編の四巻から構成され、全体としてはデカルト哲学を踏襲するものであるが、しかし同時に、ガッサンディ [Pierre GASSENDI, 1592-1655] やレギウス [Henricus REGIUS, 1598-1679] といった経験主義者たちとの折衷的見解も認められる。当書は、デカルト、マルブランシュ [Nicolas de MALEBRANCHE, 1638-1715]、ガッサンディら17世紀を代表する哲学者たちの思想の潮流を汲んだ、近世哲学の教本とみなされうるものであろう。

最後に、当該文献の訳出に係る意義について付言しておきたい——訳者の目下の研究課題は、西洋近世における「意識 [conscientia; conscience]」概念の生成史を〔再〕

構築することである。代表的な西洋近世哲学史研究によれば、哲学的概念としての意識が自覚的に使用されるには、17世紀後半に活躍したデカルト主義者のマルブランシュやレジスを俟たなければならないⁱⁱⁱ。たしかに彼らは、それまで「良心」の意で用いられていた〈conscience〉というフランス語に「意識」という非-価値評価的な意味を付与した最初期の哲学者ではある。しかしこのことは、哲学的概念としての意識がそれ以前には見出されえないということを必ずしも意味しない。事実、マルブランシュやレジスに多大な影響を与えたデカルトも、フランス語の〈conscience〉の語源である〈conscientia〉というラテン語を、良心という意味では理解しえない仕方で使用しているのである。もっとも、明確に定義されることなくこの語が多用されている^{iv}というテクスト的事実に鑑みれば、デカルトが〈conscientia〉を全く独自の意味で使用していたと解釈することが困難であるということもまた事実である。そこで、本研究課題を遂行するためには、デカルト主義者たちによる当該語の用法とデカルト本人による用法とを対照し、その共通点および差異を抽出するという作業が必要となる。しかし、マルブランシュの著作における該当箇所の部分訳^vは存在するものの、レジスの著作はいずれも未邦訳であり、その関係箇所の訳出は基礎的作業として不可欠かつ喫緊のものであるといえる。

本稿が将来的に、「意識」概念に関する哲学史的研究の、またより広く西洋近世哲学史研究のさらなる発展に僅少なりとも資することを希求する次第である。

2. 凡例

・以下の原本（フランス国立図書館電子図書館ガリカ [Gallica] 所収）を訳出の底本とする。

RÉGIS, Pierre-Sylvain. *Système de philosophie, contenant la logique, la métaphysique, la physique et la morale*. Tome 1. Paris : L'Imprimerie de Denys Thierry, aux dépens d'Anisson, Posuel et Rigaud, libraires à Lyon, 1690.

・訳出にあたり、鉤括弧は原文中のイタリック体を、大括弧は原語を、亀甲括弧は訳者による補足を表す。また、二重ダッシュおよび丸括弧は訳文を明瞭にするために訳者が使用したものである。

・原文からの引用は、現代表記に改める。

・訳文中の註釈は、すべて訳者によるものである。

・註釈におけるデカルトの文献からの引用は、以下の編著による。

AT: DESCARTES, René. *Œuvres de Descartes*. Édités par Charles Adam et Paul Tannery. 11 vols. Paris : J. Vrin, 1964–1974.

3. 試訳

ピエール＝シルヴァン・レジス

『哲学の体系』

——論理学、形而上学、自然学、道徳を含む——

第一巻

Système de philosophie,

contenant la logique, la métaphysique, la physique et la morale.

Par Pierre-Sylvain RÉGIS.

Tome Premier.

形而上学、あるいは知性的諸実体とその諸属性とについての認識

La Métaphysique, ou la connaissance des substances intelligentes, & de leurs propriétés

序文

Avertissement

古代人のなかには、形而上学を論じた哲学者が多数いた。だが今世紀に至るまで、この〔形而上学という〕学問の対象を十分に明白に知っていた者はおらず、〔形而上学を論じた古代人たちは〕形而上学的真理——これは、事物の真理について判断するための規則としては役立つが、しかし何らの実在をも私たちに認識させることのないような、特定の明晰かつ明証的な命題^{vi}である——と、形而上学的事物——これは、物質から切り離され、また物質よりもよく知られる知性的実体^{vii}である——とを完全に混同していた、ということは認められなければならない。

それ自身において考察される知性的実体は、一般的に精神と呼ばれ、またそれが結合しているところの身体との関係において考察される精神は、魂と呼ばれる^{viii}。

それ自身において考察される精神の認識へと人々を向かわせようとするのは、無益なことであろう。というのも、精神はそれ自体で知解可能であるのだから、その何たるかを知らない者はいないからだ。しかし、魂を認識するよう人々を仕向けるというのは、大いに重要なことである。なぜなら、魂は、その本性によっては知解可能でないので、それ自身によって知解可能であるところの諸事物によって知られる必要があるからだ。以上の点からして私たちは、魂の認識を、形而上学の原理およびその最も優れた分野とみなすことになるのだ。

この形而上学の分野は最も優れてはいるものの、それにもかかわらず私たちはこれを十分に発展させてもいなければ完成させてもいない。一般人はこれ〔＝魂の認識という形而上学の分野〕を完全に無視しているし、また、学識を誇る者たちのあいだにも、これを検討しようと努める者はほとんどいない。一方の人々は、わずかでも魂を認識することは不可能であると確信しているが、それは彼らが、自らの有する諸観念を、その表象的な存在に従って、換言すれば、他でもなく特定の当の事物を表象するという性質に従って考察することに専心してしまっているということから生じる。〔つまり〕彼らは、決して自分自身へと立ち返ろうとはせず、その形相的な存在に従ってそれら諸観念——それが魂の様態であるかぎりで——を考察するのだ。他方の人々は、反対に、単に魂を思惟する実体とみなすことで、これをよく認識していると思込み、それが結合しているところの身体との関係性を考慮することがない。ここにおいて彼らは大きな思い違いをしているのであって、それが魂であるがゆえに重視されている当の魂の全機能が、魂が結合しているところの身体の運動に絶対的に依存しているということを経験は明白に示しているのであって^{ix}、このことは、この〔魂と身体との〕結合の認識を全くもって必然的なものにしてしているのである。

形而上学は、ただ魂が魂自身を認識するのに役立つものというだけではなく、魂の外にある諸事物を認識するのに必要不可欠なものでもあり、あらゆる自然学は形而上学に依拠する。〔つまり〕数学、自然学、道徳は形而上学の諸原理に立脚するのだ^x。事実、もし幾何学者たちが、三角形の三つの角度は二直角に等しいということを確認するならば、彼らは、形而上学の確実性——これは、明晰に理解されるものはすべて真であるということ、また、そうであるのは、あらゆる観念が、その表す諸属性の一切を形相的に包含するような一つの範型的な原因をもっていなければならないからであるということ、彼らに教える——を受け取っているのである。〔また〕もし自然学者たちが、延長実体が存在するという、そしてそれが多くの物体へと分割されるということを確認するならば、彼らはこのことを形而上学——これは、自らが延長についてもっている観念が一つの範型的な原因（これは延長それ自体以外にはありえない）をもたなければならないということ、またそれのみならず、自らがもつ様々な感覚が、それに対応するところの、そして、質料の分割から生じた個々の諸物

体でしかありえないところの様々な作用因をもたなければならないということを、彼らに理解させる——によって知るのである。最後に、もし道徳哲学者たちが、私たちの義務の認識は必然的であるということを確認するならば、彼らはやはり、形而上学の確実性——これは、人間が自由であるということ、そしてそれゆえに人間の主要な完全性は神が与えてくれた自由をよく使用することのうちに存するという——を、彼らに教える——を受け取っているのである。彼らは、道徳の諸格率に従うことでのみ意志の善き使用を成しうるのであり、したがってこの〔道徳の諸格率の〕認識は必要不可欠なのである。

形而上学は、ただあらゆる自然学の基礎づけに役立つというのみならず、それらよりも単純かつ容易に獲得される。人間の精神は、それがいかなる性分であろうと共通してこの学問〔＝形而上学〕に開かれているのであって、それはなぜなら、実生活においても人間社会においても、〔人々を〕それ〔＝形而上学〕へと誘わないもの、導かないものなど何もないからである。あらゆる機会、あらゆる欲求はいつでも、魂の認識に係る形而上学の素材となるのであり、そして私たちは、この〔魂の〕認識の対象となる諸事物の証拠一切を自らのうちで経験するのだ。〔しかし〕他の諸学問においては、検討すべき諸対象を考察するために私たちは自分自身から出ていかなければならないのだが——たとえば、私たちは図形を観察するために自らから出ていき幾何学へと向かうのであり、〔また〕運動を考察するために自らから出ていき自然学へと向かうのである。そして最終的に、他の人間たちの振舞いに注意を向けるために道徳論へと向かうのである。

これらの考察および他多くの考察は、私たちを、魂に関係する形而上学の分野を個別的に検討するよう仕向けるのであり、その関係で私たちは本論を三巻に分割する。第一巻において、私たちは精神をそれ自体において、そして身体との関係において考察する。第二巻において、魂の力能およびその機能を検討する。そして第三巻において、精神を死後に身体から分離されたものとして考察する。これらのことをより秩序立って行うために、私たちは分析と総合〔という方法〕を使用する。分析については、諸事物の实在と本性とを発見するために〔使用し〕、総合については、既知の諸事物から、それに依存しているところの諸属性を導出するために〔使用する〕。

そして、真理の探究においては、曖昧なことばを避け、それ自体によって知られる確実な諸命題を、〔未だ〕よく知られてはいない他の命題を導出するために定立すること以上に必要なものはないのだから、私たちは、第一巻第一部のいくつかの章に対して「考察」〔という項〕——これは、私たちに役立つであろうことばの定義のみならず、いくつかの公理、換言すれば、それ自体によって示されるであろう真理を含んでいる——を追加するつもりである。

この方法に従って、私たちはたしかに形而上学の認識を前進させようだろう。なぜ

なら、私たちが提示する諸公理は、実在に、また精神および身体の個別的な本性にのみ立脚するにもかかわらず、私たちは、それら〔諸公理〕をそれ以外の残余のもの一切へと拡張せずにはいられないであろうからである。というのも、私たちの精神は、それが身体の本性ないし精神の本性を有するのでない限りその認識に到達しうるものはないというような本性に由来するからである。そういうわけで、これら二つの実体の本性を、〔実際に〕それらによって構成されている人間と同じだけ有しているものは〔人間の他に〕ないのだから、私たちはとりわけ、その本性と諸属性とを見出すために、人間を検討するよう努めるだろう。

この検討によってこそ、私たちは、精神と魂とを、そして人間の身体とそれ自体で考察された物体とを区別することを学ぶ。これによってこそ、私たちは、精神と身体との結合の何たるかを、この結合の条件の何たるかを、いかにしてこれら二つの実体が相互に働き掛け合うのかを、なぜ魂が知性と意志という二つの一般的な力能に分割されるのかを、そして最後に、この二つの力能とそれに依存する諸機能にはいかなる種類があるのかを、認識することを学ぶのだ。

〔形而上学編〕 第一卷

——人間の確実性の諸原理を含む——

LIVRE PREMIER

Contenant les principes de la Certitude humaine

第一部「存在について、および、精神・物体・神・人間の本性について」

Première partie : De l'Existence & de la Nature de l'Esprit, du Corps, de Dieu, & de l'Homme

第一章「自らの固有の存在をいかに確証することができるのか」

Chapitre premier : Comment chacun se peut assurer de sa propre existence

即断と偏見とは人間の精神に極めて多くの影響を及ぼすものであり、それは、多くの人々が、真理を認識するためとはいえ自身がそれについていくらか確実であると考えているところの事物の検討へと向かうならば誤りを犯すことになる、と考えてしまうほどである。それにもかかわらずこの検討は、わずかでも反省を行った後では、自らの認識にやって来た諸事物が真なのか偽なのかと疑う理由があるということから自らの固有の経験によって見出さない者はいないだけに、一層必要不可欠なものである。そして、たとえそれらの事物が自身の信じていたとおりに存在するのだと確信してい

たとしても、この認識に至ったのは感覚の道によってなのか、あるいは他の様々な方法によってなのかどうかを、また、各々の事物を信じているのはそれが真であるがゆえになのか、あるいは単にそのように信じることに慣れているがゆえになのかどうかを検討することは、理に適っている。

したがって、確実な認識を得るためには、精神のうちに入ってきたものすべてを検討する必要がある。そして、各人が、自身が習得したと思い込んでいるあらゆるものについて、即断や偏見によってではなく明晰判明な認識によってでなければ何もものも真と認めない^{xii}というほどに、全般的な検査を行う必要があるのだ。

そして、真理の探究において理性をよく導くためには、分析の諸規則に従い、それら規則によってよりよく知られるものを使って諸事物の検討を始める必要があるのだから、その順序が求めるのは、自分自身を検討することによって形而上学を始め、自分自身の実在と本性とを認識するより前には私たちに知られうるものは何もないということを確認することである。

この原理に従えば、自身の実在を確認するために各人が成しうる分析は以下のとおりである。私は極めて多くの認識をもっている。私は、たとえば空や大地や海その他を認識するが、私がこれらの認識をその対象から分離し、そして前者を単純な知覚——これによって私は自らが空や大地や海その他を認識していると信じるのだ——とみなすとき、私はそれらの認識が実在するということを疑うことはできない。ところで、自然の光は、もし私が無であればこうした知覚や認識はもちえないということを私に教える。ゆえに、私とは何ものかであり、したがって私は実在するのである。そしてこれこそ、私が求めたものである。

それゆえ私は、私が認識するそのたびごとに、あるいは、私が何かを認識していると思っているそのたびごとに、私は実在する、ということを確認する^{xiii}。そして私はこの命題の真理を確信するわけだが、しかしそれは真なる推論によってではなく、純粹で内的な認識——これは、すでに得られているあらゆる認識に先行するところの、そして私が「意識 [conscience]」^{xiiii}と呼ぶところのものである——によってなのである^{xiv}。事実、自身が認識している、あるいは認識していると思っていると私が語るとき、この「私」それ自体が自身の実在を前提しているのであって、〔そうでなければ〕私が認識すること、あるいは単に〔認識していないにもかかわらず〕認識していると思いつくことは不可能であり、また、私が実在するものではないことも不可能なのである。

「形而上学に関する第一の考察」

Premières Réflexions sur la Métaphysique

個々の学問の諸原理は、これら諸学問の対象であるところの各分野について成された特定の考察以外の何ものでもないのだから、この形而上学の論攷において私は、可能な限りすべての順序を守るために、各々の推論の後に、〔すでに〕検討された主題について自身が行った考察を置いた。そして私がこれをこのように使用するのには、曖昧性を有していようといなかりと、私が発見した諸真理に名辞を与える理由があるためであり、またそれ自身として私に示されたあらゆる真理を公理に変換するためでもある。

この方法に従おう。私が実在することを信じるために私がもっている理由を検討するとき、私が自身の実在[existence]についてもっている認識が、私が自身の本質[être]についてもっている認識とは決して異なることに気づく^{xx}。こうして私は、一般的に、「本質[Être]」という語によって、実在するものすべて——どのような仕方でも実在するにせよ——を意味することにしたのである。

次いで、私が自身の実在を確認することのできるあの特殊な方法に対して考察を行うとき、そして、それ〔=私の実在〕について私がもっているところのあらゆる確実性が、もし私が実在する何ものかであればもちえなかったところの諸認識に立脚していると考えるとき、私は一般的に次のように結論づけ、またそれを第一の公理として定立する。すなわち、「あらゆる属性は存在に属すること」、あるいは同じことを否定的に換言すれば、「無、すなわち存在しないものは、いかなる属性をももたないこと」。

ところで、無がいかなる属性をももたないということからは、第一に、存在しないものが存在を与えられることはありえないこと、したがって、あらゆる結果、すなわち新たなものから生み出されるすべてのものは、自身とは異なる原因に依存するということになる。こうして私は、「あらゆる結果は一つの原因を前提すること」を第二の公理として定立する。

第二に、一つの結果は、その完全な原因から生じないところの完全性を決してもちえないということになる。というのも、そうでなければこの結果は、無からこの完全性を受け取ったということになり、矛盾であるからだ。こうして私は、「一つの結果は、それがその全原因から受け取った以上の完全性をもちえないこと」を第三の公理として定立する。

第三に、各々の存在はそれ自身で今の状態にとどまろうと固持することになる。それはなぜなら、この存在はそれが〔すでに〕有している状態以外の他一切の状態を失っているのであって、もしそれが新しい状態を与えられるならば、この状態は無から

生じたということになるからだ。これは不可能である。こうして私は、「一つの主体に対して生じるあらゆる変化は、一つの外的な原因から生じることを第四の公理として定立する。この公理に従えば、静止している物体は自力では決して動かないし、また愛する精神は、何か新しい原因がそれを引き起こすのでなければ、決して憎むことはないのである。

ⁱ 以下の解説は、*New Advent: Catholic Encyclopedia online* (1913) (<http://www.newadvent.org/cathen/12721a.htm>) および小林道夫・小林康夫・坂部恵・松永澄夫編『フランス哲学・思想事典』(弘文社、1999年)における当該人物の項に基づく。

ⁱⁱ 1618年に富裕な商家の息子としてアミアン [Amiens] に生まれる。パリで伝統的なスコラ哲学を学び、後にデカルト哲学へ傾倒する。毎週水曜日に自宅で公開講演を行っていた。1672年にパリで死没した。著書に、『自然学論 [Traité de physique]』(1671年) および『哲学についての対話 [Entretiens sur la philosophie]』(1671年)がある。

ⁱⁱⁱ Geneviève RODIS-LEWIS, *Le Problème de l'inconscient et le cartésianisme* (Paris : P.U.F., 1950), 111 sqq.

^{iv} 『ピュルマンとの対話』(1648年)では「意識することは思惟することであり、自身の思惟について反省することである」という簡潔な規定がみられるが、しかしこれに先んじて、『省察』(1641年)所収「第二答弁」附録「神の存在と魂の身体からの区別とを証明する、幾何学的な様式で配列された諸根拠」および『哲学原理』(1644年)における「思惟」の定義中で、「意識 [する]」という語を、いかなる説明もなしに使用している。この点から、デカルトが〈*conscientia*〉という語を全く独自の意味で使用していたと解釈することは困難である。

^v 山田弘明「マルブランシュ「観念の本性について」訳注」『名古屋大学文学部研究論集』42号(1996年): 53-87頁。また、依田義右の浩瀚な研究書『マルブランシュ——認識をめぐる争いと光の形而上学』(ぶねうま社、2014年)では、マルブランシュの著作が豊富に引用されている。

^{vi} 訳註①:「それら[「思惟するものが存在しないことはありえない」といった命題]は最も単純な概念であり、それらだけでは存在する事物を知らせない」(DESCARTES, *P.Ph.*, AT-VIII, 8, art. 10.)。

^{vii} 訳註②:「自分と異なるすべてのものを虚偽と想定しているところのこの私たちは一体何

であるのかを検討してみるならば、延長・形・場所的運動などといった、物体に帰せられるべきものは、いずれも私たちの本性には属さず、ただ思惟のみがこれに属することが明白に見出されるからである。それゆえ、思惟はいかなる物的なものよりも先に、またより確実に認識されるのである」（*Ibid.*, art. 9.）。

viii 訳註③：「思惟が直接的にそのうちに内在するところの実体は「精神」と呼ばれる。私は、ここで魂についてというよりはむしろ精神について語ることにする。というのも、魂という名称は両義的であり、しばしば物的な事物に対して流用されているからである」（DESCARTES, *2ae Resp.*, AT-VII, 161.）。

ix 訳註④：「このこと [= 心身の結合] は説明するのがきわめて困難だが、しかしここでは経験で充分であり、経験はここではどんな仕方によっても否定できないほど明晰であって、それは様々な情念などにはっきりと表れる」（DESCARTES, *Ent. Burm.*, AT-V, 163.）。

x 訳註⑤：「哲学全体は一本の木のようなものである。この木の根は形而上学であり、幹は自然学である。そして、この幹から出ている枝が他のすべての学問にあたる。これらの他の学問は三つの主要な学問にまとめられる。すなわち、医学、機械学、道徳である」（DESCARTES, *Principes*, AT-IX (ii), 14.）。

xi 訳註⑥：「第一 [の準則] は、私が明証的に真であると認めるのでないかぎり、いかなるものをも真として受け取らないということだった。換言すれば、即断と偏見とを注意深く避けることであり、また、疑いを差し挟む余地の全くないというほどに明晰かつ判明に精神に現れるもの以外は、何も私の判断の中に含めないということ」（DESCARTES, *D.M.*, AT-VI, 18.）。

xii 訳註⑦：「私は在る、私は実在する」というこの言明は、私によって言表されるたびごとに、あるいは精神によって捉えられるたびごとに、必然的に真である」（DESCARTES, *Med.*, AT-VII, 25.）。

xiii 訳註⑧：「意識することは思惟することであり、自身の思惟について反省することである」（DESCARTES, *Ent. Burm.*, AT-V, 149.）。「魂については、それ [= 物体] と同じではない。私たちは魂をその観念によって知るのではないし、それを神においてみるのでもない。ただ意識によってのみ知るのである。魂についての私たちの認識が不完全なのはこのためである。私たちが自身の魂について知っているのは、私たちのうちに生起していると感得していることのみである」（MALEBRANCHE, *Recherche de la vérité*, 2nd edition, ed. Geneviève Rodis-Lewis, Paris : J. Vrin, 1972, 451.）。「私たちが意識によって魂についてもつ知識が不完全であることは本当であるが、それは偽ではない。反対に、私たちが感得、すなわち意識によって身体についてもつ知識は、[...] 不完全であるだけでなく偽である。それゆえ、私たちが身体について

もつ感得を正すために、身体の観念が必要なのである。しかし、私たちの魂の観念は必要ない。なぜなら、魂について私たちがもっている意識は、私たちが誤謬に陥れることはないからだ。魂の認識において間違わないようにするためには、それを身体と混同しないことで充分である」(Ibid., 453.)。

xiv 訳註⑨:「たしかに、「思惟とは何であるか、また、実在とは何であるかということを知っているのなければ、自身が思惟していること、また、自身が実在していることを確知しえない」ということは真実である。しかし、だからといって、このためには、反省された、あるいは論証によって獲得された知識が要求されるというわけではない[...]。そうではなく、そのことを、反省された知識に常に先行するところの、あの内的な思惟によって知ればそれで事足りるのであって、この内的な思惟は、思惟についても実在についても、すべての人間に本有的である」(DESCARTES, *6ae Resp.*, AT-VII, 422.)。

xv 訳註⑩:〈existence〉と〈être〉との区別は、ラテン語の〈*existentia* [事実存在]〉と〈*essentia* [本質存在]〉との区別に対応する。ここでいわれているのは、「私は思惟するものである [Je suis une chose qui pense]」という本質存在(～である)はそのまま「私は実在する [J'existe]」という事実存在(～がある)を意味するということである。

* 本稿は JSPS 科研費 20K21950 の助成を受けたものである。

(たむら・あゆむ 国立茨城工業高等専門学校助教)